

令和5年度春季特別展

# のぼさんの お引越し

—住居にみる子規の人生観—



令和5年 4月29日(土・祝)～6月12日(月)

休館日 5月2日・9日・16日・23日・30日、6月6日(いずれも火曜日)

開館時間 午前9時～午後6時(展示室入場は午後5時30分まで)  
※4月30日までは午後5時まで(展示室入場は午後4時30分まで)

会場 松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料 個人 200円 団体 160円 65歳以上 100円 高校生以下 無料

## 《ギャラリートーク》

日時：4月30日(日)、5月5日(金・祝)、5月28日(日)

ともに午前10時30分から50分程度

会場：3階特別展示室 ※聴講には観覧券が必要

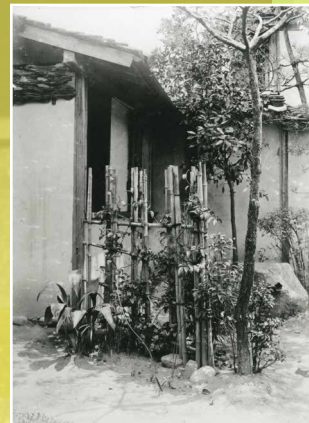
## 《学芸員による関連講座》

演題：「子規と住居」

日時：6月11日(日) 午前10時30分から正午まで

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

※ギャラリートーク・関連講座は、新型コロナウイルス感染症の状況により、中止もしくは入場制限等の変更を行う場合があります。



# 松山市立子規記念博物館

松山市道後公園 1-30 Tel. 089-931-5566  
<https://shiki-museum.com>

# のぼさんのお引越し

## —住居にみる子規の人生観—

子規は一生の間に、数多く引越しをしています。短期間の仮住まいも含めると、その数は二十を超えます。子規はいつどこで誰と暮らし、どのようなときに住居を替えたのでしょうか。

慶応三（一八六七）年、松山に誕生した子規は、生後間もなく藤原新町の生誕地から中の川沿いの湊町の住居に引越します。この家には中学校進学を控えた子規のために、三畳の勉強部屋が増築されました。子規は自室に「香雲」の額を掲げ、仲間たちと回覧雑誌や漢詩文を作って楽しみます。

明治十六（一八八三）年六月、子規は念願の東京での学生生活をスタートさせます。上京直後は旧藩主久松家の書生小屋で暮らし、のちに親戚の藤野家や間借りした下宿先を転々としました。子規は東京大学予備門で学びながら、同じく上京していた清水則遠や秋山真之ら同郷の友人たちと生活して青春を謳歌します。

明治二十一年夏、子規は隅田河畔の「月香楼」に仮寓して「七草集」を執筆し、九月には久松家が設立した常盤会寄宿舎に入舎します。翌二十二年五月、子規はこの寄宿舎で喀血して肺病と診断され、「子規」と号しました。一方で、文学的な趣味を共有する寄宿舎監督の内藤鳴雪、郷友の新海非風や五百木飄亭らと寝食をともにするなかで、子規の俳句や文学に対する情熱は次第に大きなものとなっていきます。

明治二十四年末、子規は小説「月の都」執筆のため、駒込追分町の下宿でひとり暮らしを始めます。翌年二月に原稿を書き上げましたが小説家の道は断念し、同月末に陸羯南の居室隣の上根岸八十八番地に転居します。ここで子規は日本新聞社への入社を決意、「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載するとともに、母八重と妹律を東京に呼び寄せました。

子規は明治二十七年二月、『小日本』の編集主任になったのを機に、羯南宅東隣の上根岸八十二番地の借家へと引越します。この地が子規の終の住処となる「子規庵」です。子規庵には各地から門人が集まり、子規の文学革新の拠点となります。明治二十八年八月、日清戦争従軍後に松山で夏目漱石の下宿「愚陀佛庵」で同居生活を送った際には、「俳諧大要」の執筆に着手しています。その後、東京に戻った子規は、病状が悪化し出歩くことができなくなりますが、清貧を旨としつつ、家族や友人たちに支えられながら病床で創作活動を続けました。

子規の東京での生活の場は、下宿や寄宿舎、借家といずれも持ち家ではない住居でした。子規の住まいの変遷から、文学活動の転機や人生観がみえてきます。今回の特別展では、子規と同居した人物のエピソードや関連資料、書簡に記された住まいに関する記述などを手がかりに、子規の人生の足跡を住居の視点からみつめ直します。



子規・新海非風筆「山吹の一枝」（明治23年頃）



子規庵縁側の子規（明治32年）



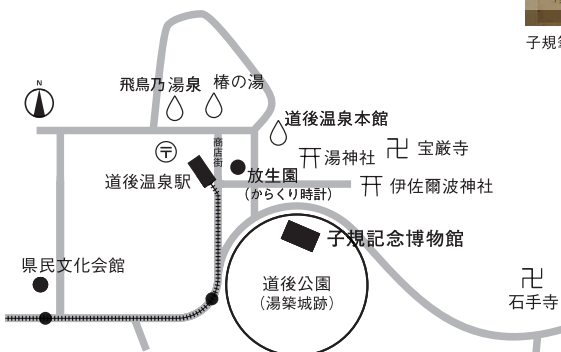
常盤会寄宿舎（個人蔵）



子規筆「飯待つ間」後記原稿（明治32年）



子規の勉強部屋



## 松山市立子規記念博物館

〒790-0857 松山市道後公園 1-30

TEL 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>

道後温泉駅より徒歩約5分/道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください

